（1）地域居住学における野迫川村での活動報告

平成 28 年度・地域居住学

地域居住学(住環境学科専門科目)で野迫川村を訪問し(フィールドワーク)、それを踏まえてワークショップを開催した。その概要と参加者の感想文である。フィールドワークは 11 月 19 日、20 日に実施した。

1. フィールドワークの概要

11 月 19 日(土)

■ 北股集落見学

北股集落近くの野迫川村役場にて、北股区長さんから当時の様子や災害の被災状況について 30 分程お話を伺った。その後、現地に移動し北股地区の被災現場を見学し、区長さんから再度話を伺った。学生から出された質問にもお答え頂いた。

■ 大股集落見学

大股集落内を大股区長さんに案内して頂く。大股集落で取り組んでいるアマゴの養殖場を見学した。また、集落内を通る小辺路を実際に歩き、集落の歴史についても区長さんから話を伺った。

■ 狩猟について講義

野迫川ホテルにて地元猟友会長曽我部さんより、地元の狩猟について、獣被害等についてお話を伺った。猟師が減少している現状とそれに伴う森林保全の現状など、村の状況について現況を把握した。

11 月 20 日（日）

■ 池津川集落見学

池津川集落を見学し、池津川区長のお話を伺った。この集落は野迫川村の中でも幹線道路から入ったところに位置し、人口減少、高齢化が特に進んでいる。その状況を伺った。また、閉校した池津川小学校、区長さんのご自宅を見学した。

2. ワークショップの概要

11 月 22 日（火）

■ ワークショップ

11 月 19、20 日の野迫川村でのフィールドワークで学んだことを踏まえ、大学で 11 月 22 日にワークショップを行なった。議題は、①野迫川村の良いところ、②野迫川村で改善した方がいいと思う点、③学生が野迫川村で貢献できると思うことの 3 点である。

これら 3 点について、学生が 6 班に分かれてグループディスカッションを行った。班内で話し合った結果を授業の最後でプレゼンし、各々の考えを全体で共有することで、野迫川村に対しての考えをさらに深めた。

3. 参加した学生の感想（抜粋）

■ 住環境学科 2回生

①野迫川村で良いところ

都市に住んでいるとほとんど触れることのできない大自然に圧倒するというか、心を打たれる感覚を野迫川村に訪れることで久しぶりに経験した。奈良市内も緑が多いところだとは思うが、野迫川村の厳しくも美しい自然の風景には心を洗われるような、なんとも言えない感動を覚えた。夜の静けさや川の音など、都市の喧騒の中で暮らしていると聞こえない自然の音を野迫川村では聞くことができた。ほっと一息つき、そばで自然を感じることができるのが野迫川村の良い点だと思う。

アマゴの養殖など、この土地の特色もみられるのも良いと感じた。実際にアマゴの養殖を見学し、アマゴを卵から成体にするまでこんなに手間と時間をかけて養殖していたのを知ったとともに、災害で被害をうけても今まで手をかけて続けているのに驚いた。

奈良女子大の狩猟サークルが野迫川村で活動をおこなっているのを知り、そのような学生への地域の伝承や若い世代との交流があるのも長所だと思う。また、話や案内をしてくださった村の人々が親切であたたかいのも印象的でよかったと感じた。

②野迫川村で改善した方がいいところ

ワークショップを通して野迫川村がよりよくなる改善点の様々な意見が出た。クマが出る、交通の便が悪い、少子高齢化などが主にあげられた。

猟友会の人の話にもあったように、人口林の割合が高く広葉樹が少ないのでクマの餌がなく人間が住む場所にクマが出没するようになったのが問題となっている。前の世代の人が植樹をおこなったことが年月を経て裏目に出たらしく、クマにとっても人間にとっても深刻な問題ですぐには解決できないが、人間とクマの関係を考えるきっかけになったと思う。野迫川村に行く前はクマが出る村というイメージが一番強かった。クマの出没頻度が増えると、村の人の普段の生活が脅かされる。またクマが出るイメージが強くなると、訪れてみようと思う人もますます観光に来なくなってしまう。クマの問題の原因は深いところにあることを知り、すぐに改善することは難しいが取り組みが迫られているのを感じた。

少子高齢化の問題も改善への取り組みが必要だ。廃校になって使われなくなった校舎がそのままになっているのも改善すべきだと考えた。

③学生が貢献できること

このたび野迫川村を訪れ、様々な良い点の発見をするとともに、野迫川村の改善点も見えてきた。そして自分達学生が野迫川村の良いところや改善した方がよいところに学生として貢献できることを大きく二つ考えた。

一つ目は、学生が野迫川村の良い点・アピールポイントを県内に伝えるという貢献の仕方である。野迫川村を訪れて学んだことでもよい。学生ならではの自由な発想でできる活動があるのではないかと思う。例えば、野迫川村を訪問するツアーを企画し、観光で訪れる人が増えることで村に活気を与える取り組みや、いきなり大きな企画をしなくとも学内で野迫川村の PR ポースターなどを作り、学生同士で伝え合うことも野迫川村を知る人が増え関心を高めるのに重要だと考えた。

二つ目は、学生が大学で学んだことや持っている知識や新しい発想を村の改善や発展に活かしてもらう貢献の仕方である。若い世代が少なくなると新しいアイディアが生まれづらくなると村

の人の話にもあった。廃校になった校舎が長年使われることのないまま建物だけ残っていたが、掃除・修理してきれいに使うことのできる状態にし、あらたな使い道を提案する取り組みも小さなことだが学生なりにできることだと思う。この建物の使い道としてはアートのプロジェクトを導入してその展示場として利用する意見がでた。アートプロジェクトは地方再生の一つの方法として各地でもおこなわれているという話を近頃聞いたので興味深いアイディアだと考える。

このように、野迫川村の魅力を外に伝える取り組みや、野迫川村を訪れて村の人々と交流し、学びや発見を村や村の外で活かす取り組みが学生として無理なく有効に貢献できることだと考える。

■ 住環境学科 2 回生

①野迫川村の良いところ

野迫川村に行って感じた山村集落の良さで私が取り上げたいことは大きく分けて“自然、人”があります。まず、自然は山村だけあって豊かで景色が良く季節の移り変わりを感じられます。さらに、川の水が透き通り綺麗で空気も澄んでいて環境さえ整えば申し分ない自然環境です。自然環境 の豊かさがもたらす安らぎや落ち着きは街中では得られない良さです。また、その自然が育む 食べ物もおいしく奈良県でずっと暮らしていても知らない部分を知れました。次に、人は各集落やホテルなどで交流して誰もが距離が近く、柔らかい空気で接してくれたため初めて来た私でも気兼ねすることなく二日間を過ごせました。日々の生活の中では皆余裕 が無く自分のことに必死な人が多

いからこそ、近頃あまり感じられない人の自然な温かさでした。

②野迫川村で改善した方がいいところ

街中の生活では得られない良いところがたくさんある村ですが、訪れる人、定住する人が少ないのが現状です。そのため自然の手入れも出来ず森が荒れ、自然動物との共生が難しくなってきています。また、必要なものを手にいれるための店も無くなってしまいます。これらの原因として考えたのは“交通と産業”です。実際、私は奈良県でずっと暮らしていますが、吉野以南は電車も通っていないため気軽に行こうと思える場所ではないし、道も国道は整備されているが、国道を外れれば細かったりカーブが多かったり、似たような道が続いたりと車で行くにもある程度の難易度があり、数えるほどしか南部には行きません。しかし、簡単に電車を通したり道の形状を変えたりすることもできません。となると、村、集落までのルートをわかりやすくするという部分を改善すべきだと 考えます。実際、バスに乗っていても同じような道で一体どこに自分がいるかわかりませんでした。これはツアー以外の初めて訪れる人には大きな問題点だと思うからです。また、村民の 安全のために集落へのルートを複数持てるようにし、万が一に孤立する可能性を下げることなど集落の安全性を高めることも人が集まるには必要だと考えます。

外部から人が来る環境になれば次は中身が必要です。林業が衰退した今、野迫川村には栄える産業がありません。働き口がないのです。ただでさえ奈良県は県外に働きに出る人が多く、野迫川から通勤できる範囲にも働き口はほとんどありません。和歌山方面にでても中心部から離れた場所なので同様です。そのため現地で何か林業に代わる産業を作ることが人を集めることに必要だと考えます。交通と産業が整い、人が増えれば環境面にも手が行き届き観光客を呼ぶことのできる村に近づけると想います。

③学生が貢献できること

私たちに出来ることのまず基本にあることは高齢化が進む村に若者の考えを伝えることです。その中でまず、若者が多く使う SNS で野迫川について“発信”し良さを知ってもらうことが一つです。次に、現地に来てもらうための“企画やアピールポイントについて現地の人に提案”します。そのために必要な施設のために民家のリノベーションなどの住環だからこそ関われる“環境整備への提案”をすることです。その後、実際に人に来てもらいその結果を踏まえ、さらに必要なことを現地の人と話し合い、自分も再発見した良さについて新たに“発信”します。発信、現地訪問、提案を繰り返し人が集まる村作りの手助けが出来るのではないかと思います。実際には、訪問中バスの中でもツアーについて話しをされていましたが、魅力的だと思うし行ってみたい人はたくさんいると思います。ですが、野迫川についてあまり知らず、関心が薄い人はそのようなツアーがあることを知らないと思います。こういう場面で若者たちが“発信”することが大きな意味があるのではと感じました。

後、若者はスマホを触ることが多いため電波が繋がらないことはマイナスかもしれないが、電子機器から離れて自然の中でゆっくりすることの魅力をかつて私は経験して感じています。若者にそのような体験をしてもらえるようなツアー内容を一緒に作るためにどのような内容だったらいいかなどの“提案”ができると思います。“現地訪問”をして自分自身が現地のモノを食べ、使うことで現地の収入にもなります。特別大きなことはできなくても小さなことが村を変える一つの鍵になると思うので、住環だけでなく大学全体で村に関わっていけたらなと思います。

今回、初めて野迫川村を訪れましたが、思っていた以上に良い場所だと感じると同時に問題が深刻だとも感じました。これから少子化が進み日本で多くの集落が消滅すると言われています。都会では得られない日本らしい良さをもつ集落をひとつでも多く残すことが日本という国を残すには必要だと思います。人間はせわしなく前に進むことに夢中になっていますが、私は今あるもので十分だと思います。今あるものを維持し生かしていけるような暮らしを提案して いけるようになりたいと豊かな自然や不便な中にもある温かさや魅力を通して感じました。

平成 28 年度・住環境学基礎実習

1. 授業の目的

平成 28 年度後期の住環境学基礎実習(中山担当)では、奈良女子大学野迫川村交流センターで「奈良女塾」に取り組んだ。この授業を受講している学生が現地の関係者と相談しながら進めることで、地域創生に寄与すると同時に、学生が山村地域の実情を学べるようにした。

2. 野迫川村「奈良女塾」の取り組み

(1)目的

野迫川村には、進学を考えている子どもたちのための学習塾がない。中には村外の遠く離れた塾に通っている子どももいるが、これには親の送り迎えが必須で、全ての子どもたちが通える訳ではない。また、村内には高校がないため、中学生は卒業後に村を離れる。そのため、小中学生には、彼らにとって身近な大人である高校生や大学生とふれあう機会がない。そこで、子どもたちの学習のサポート、大学生とのふれあい、またこれらを通して子どもたちが将来について考え

るきっかけになるようなプログラムを奈良女塾として計画した。平成 27 年 3 月に第一回を実施し、平成 28 年 8 月に第二回、平成 29 辺 3 月に第三回を実施した。

(2)内容

奈良女塾の具体的な内容は、① 勉強、② パソコン教室、③ レクリエーション、④ 未来講座である。

①勉強

ワークを用いて各学年の総復習を行う。大学生がわからないところを個人的にフォローする。高校受験を控えた新中学 3 年生には、各自の苦手科目など柔軟に対応する。

②パソコン教室

Illustrator、PowerPoint、AutoCAD のソフトを用いて、パソコンを通じて自己表現やものづくりの楽しさを子どもたちに伝える。

③レクリエーション

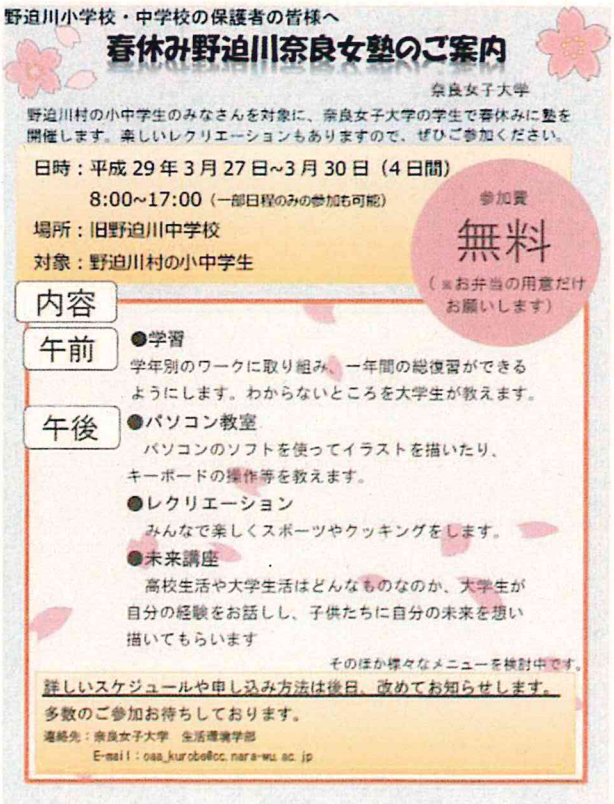
スポーツやクッキングを通して、大学生を含め、学年を超えての交流を深める。普段は少人数でしか活動できない子どもたちに、大人数で取り組める機会を作る。

④未来講座

大学生が子どもたちに自らの経験を語り、将来の高校生活や大学生活、そして自分の未来を考えるきっかけになるようにする。

(3)参加者

塾の参加対象者は野迫川村小学校、中学校に在籍している児童、生徒である。


野迫川小学校・中学校の保護者の皆様へ

春休み野迫川奈良女塾のご案内

奈良女子大学

野迫川村の小中学生のみなさんを対象に、奈良女子大学の学生で春休みに塾を開催します。楽しいレクリエーションもありますので、ぜひご参加ください。

日時：平成 29 年 3 月 27 日~3 月 30 日（4 日間）
8:00~17:00（一部日程のみの参加も可能）
場所：旧野迫川中学校
対象：野迫川村の小中学生

参加費
無料
（※お弁当の用意だけお願いします）

内容

午前
●学習
学年別のワークに取り組み、一年間の総復習ができるようにします。わからないところを大学生が教えます。

午後
●パソコン教室
パソコンのソフトを使ってイラストを描いたり、キーボードの操作等を教えます。
●レクリエーション
みんなで楽しくスポーツやクッキングをします。
●未来講座
高校生活や大学生活はどんなものなのか、大学生が自分の経験をお話しし、子供たちに自分の未来を想い描いてもらいます

そのほか様々なメニューを検討中です。

詳しいスケジュールや申し込み方法は後日、改めてお知らせします。
多数のご参加お待ちしております。

連絡先：奈良女子大学　生活環境学部
E-mail：oaa_kurobo@cc.nara-wu.ac.jp

（2）　住環境学基礎実習における十津川村での活動報告

平成28年度の住環境学基礎実習（室崎担当）では、昨年度に引き続き十津川村の谷瀬地区に通い、村の方と一緒に今後の移住・定住を見据えた村づくりに取り組みました。十津川村には、自然豊かな観光資源や濃密なコミュニティなど、都市部では失われてしまった豊かさが多く残っています。

今年度は、このような十津川村の魅力を学生目線で発信するための方法の検討や情報収集を目的として現地での活動を行いました。初めて十津川村に訪問する学部生と一緒に谷瀬のつり橋や瀞峡、玉置神社などの主要な観光名所を見学し、今後より観光客が訪れるようになるための情報発信の内容・方法を考え、話し合いました。また、十津川村での暮らしを移住者目線で体験してもらい、率直な体験の感想を通して、今後の村づくりへの課題を学生目線から考えました。谷瀬地区の村づくり活動では、ゆっくり散歩道の看板を学生の意見を活かして改良案を考え、レーザー加工機を用いて新たな看板プレートづくりを行いました。

昨年度に引き続き、2 月には谷瀬地区で育てた酒米をつかった純米酒「谷瀬」の酒仕込みをお手伝いします。春には美味しい新酒が完成する予定です。

この授業の対象は学部3回生で、TA として修士の学生も参加しました。

■　活動の日時・内容

10月 9,10日	・十津川村谷瀬地区にて、村の暮らし体験宿泊 ・十津川村魅力発見と情報発信に関する意見交換
10月～3月	・十津川村谷瀬地区内のゆっくり散歩道の看板プレートの製作
2月 12～18日（予定）	・美吉野醸造で十津川村谷瀬地区の酒米をつかった純米酒「谷瀬」仕込み
3月 27,28日（予定）	・十津川村谷瀬地区内のゆっくり散歩道の看板設置完成

谷瀬集落内散策

十津川村暮らし体験の様子

◇十津川村の暮らし体験宿泊を１泊２日で行いました。初日は、十津川村谷瀬地区での暮らし体験と集落内観光体験を、谷瀬地区に来る観光客や移住希望者の目線で行い、意見交換を行いました。暮らし体験では農作業を行い、集落内観光体験では、集落の主要観光地である谷瀬のつり橋や集落内の古民家“こやすば”に足を運び、その場所の魅力や人を呼び込むための課題を収集し、宿にて参加学生が集まり意見を出しあいました。
◇翌日は、十津川村全地域の観光活性化に向け、村の魅力発見と情報発信を目的として、村内に点在する観光資源を訪問して観光体験を行い、実際に観光客が足を運ぶためにはどうすればよいのか等を検討しました。
◇挙げられた意見・提案：十津川村の魅力は、豊かな自然環境もさることながら、「人」であることが挙げられました。だからこそ、情報発信の内容は、住んでいる「人」が持つ地域情報が良いという意見や、観光スポットの情報だけではなく、十津川村の豆知識など読んでいて楽しいと思える内容が掲載されたパンフレットやチラシがよいという意見、十津川村の主要観光名所は点在しているが、全部回ろうとしている人も多くみられたので、スタンプラリーなどを行ったらよいのでは、など多くのアイデアが生まれました。

参加学生の感想

十津川村での暮らしの体験は常に新たな発見があります。集落の方は訪れるたびに農作業の仕方やコツ、集落の伝統などを教えてくださり、これらは長年の経験や勘がなければ知りえないことで、インターネットで調べても出てきません。初めて十津川村を訪れた学生とともに意見交換をすることで、今以上に十津川村の魅力は「人」であることを再認識できました。だからこそ、あたたかな人のつながりがよくわかるような十津川の魅力発信をできるように努めたいと思いました。

初めての谷瀬、初めての宿泊で、分からないことだらけでしたが、いろんなことを知り、また楽しむことのできた二日間でした。谷瀬の方々は、初めて訪れた私たちも笑顔で迎えてくれ、すごく嬉しかったです。自然溢れる山村の景色を見たり、十津川村の名産を知ったり、普段体験することのない畑仕事をしたり、とても勉強になりました。私たちが知り得た谷瀬の魅力やそこに

住まう人々の魅力を、もっとたくさんの人に知ってもらいたいなと思いました。

■　１０月～３月　十津川村谷瀬地区内のゆっくり散歩道の看板プレート製作

◇十津川村谷瀬地区では、谷瀬の吊り橋から集落内をゆっくり歩いて山の上の展望台に至る「ゆっくり散歩道」を整備するなどの村づくり活動が住民主導で行われています。現在は昨年度のワークショップを元に、看板の改良に取り組んでいます。看板の大きさ、数、記載内容を学生で検討し、段ボールでモックアップをつくりながら検討を重ねました。看板の材料は十津川材を使用し、学生の手で製作することにしました。
◇大学で試作した看板モックアップを、集落の寄合に持って行き、集落の方の意見を聞きながら相談を重ねた結果、看板は２種類に作ることに決まりました。一つは、道しるべの役割をする看板で、十津川産の木材にレーザーカッターで直接案内の文字を印字することで長期で使えるものを目指しました。もう一つは、村の魅力を伝える手書きイラストの看板です。
◇附属中等教育学校の技術室にて木材へのレーザー加工を行い、３月末までに現地での設置を完了させる予定です。

看板作成の様子

木材へのレーザー加工の様子

参加学生の感想

ゆっくり散歩道沿いにある看板の位置や記載内容をひとつひとつ検討し直し、観光客が道に迷わず、より楽しく歩いてもらえる看板を目指しました。最初は全て木材にする予定でしたが、手描きの看板もあたたかみがあるから残したいという集落の方からの意見は、自分たちの手でゆっくり散歩道をつくることから始められた集落の方たちの思い入れが感じられました。

木材へのレーザー加工は想像以上に時間が手間や時間がかかり大変でしたが、これからも長期間そこに立ち続け、道案内をしてくれる良いものが完成しました。設置して集落の方やたくさんの観光客の方に見てもらうのが楽しみです。

ゆっくり散歩道の案内看板を作り直しました。観光客の方からも多く見られる散歩道の看板を作ると聞き、集落の顔の一部を任せてもらえることに驚きました。最初は不安もありましたが、

どんな看板だったら見やすいだろう、村の魅力が伝わるだろうと考えるのはとても楽しい時間でした。

十津川の杉材と私たちのデザインが合わせ、可愛く実用的な仕上がりになったと思います。お披露目する日が楽しみです。

（3）　中山間地域における活動報告

2016年5月14日、私は『パサージュ20A：下市町へ移行』授業のTAとして、下市町への巡検を行った。以下では、主に現地での交流活動の内容と実践状況を紹介する。

下市町は、奈良県の南半分を占める吉野郡の北西に位置し、吉野川（和歌山県では紀ノ川）の南側で、里山の魅力に出会える町である。大きくわけると山岳地帯と丘陵地帯になる。月ヶ瀬梅林、賀名生梅林と並ぶ奈良県三大梅林のひとつ、広橋梅林がここにあった。参加者は事前準備を怠らず、参考文献を読む上で、先生から配布された地形図に下市町の町界をうつし、果樹林などの土地利用を色で塗り分けていた。

巡検当日は近鉄電車で下市口駅まで移動、その後バスに乗り、時間がかかったものの、天候にも恵まれ、最高の巡検日和となった。一日目は、下市町役場地域づくり推進課の方から、町の地域おこし情報や、割り箸産業について紹介していただいた。人と経済のつながり、地元産業、観光と移住の問題など、短時間ではあったが幅広く状況がわかった。割り箸発祥の地として名高い下市町は、今、建割り箸職人の高齢化が進んでいる。参加者は作業現場を見学しながら、職人たちから聞き取り調査を行った。

夜の宿泊は、1999年に廃校になった旧広橋小学校をリフォームしたコミュニティー施設、「よしの広橋スマイルヴィレッジ」であった。学生たちは、当日の色々な見聞を整理したり、交流したり、翌日の自然観察巡検の準備を行った。

二日目は、中央構造線断層帯や果樹林などの見学・観察を行った。教室での学習とは違い、まわりの景色を見て、現地の土地を歩き、先生から変動地形や地質などの説明を受けた。特に、旧吉野川が堆積させた礫層と下市町の土地利用との関係が、より深く理解できたと思う。

写真左：下市町の割り箸工場　写真右：中央構造線断層破砕帯付近の堆積岩

巡検に行く前はどれも同じような山にしか見えなくても、帰りにはヒノキとスギの区別や果樹林の特徴がわかるようになった。疲れたが、この充実した２日間は、学生たちには、かなり貴重な体験になったことと思う。

（4）　地域コミュニュティにおける活動報告

下市町での活動報告農林塾に参加する都市住民の意識とその背景

◇授業の概要

平成28年度文学部専門科目（COC+科目）「コミュニティ・リサーチ」の授業は、奈良県下市町の協力を得て、下記の4回実施された。

- 第1回（4/16）講義：地域社会の諸問題、地域参加型アクション・リサーチ「らくらく農法」の紹介、参加型地域社会調査法の概要（買い物マップ・支え合いマップ・ムラ資源点検・フォーカスグループインタビュー）
- 第2回（5/22）現地実習：（午前）巡検（栃原区柿間引き体験、直売所「道しるべ」見学、講義）、（午後）グループ別調査
  【A班】中山間地域高齢女性グループ・インタビュー（西山区）
  【B班】巡検（西山区、丹生区、広橋区）
- 第3回（6/11）現地実習：（午前）巡検（平原区ピザづくり体験）、（午後）グループ別フィールドワーク
- 第4回（7/16）現地活動：奈良女子大学下市アクティビティセンター開所式、下市町奈良女子大学連携公開講座「地域の将来を考えるために」参加、当センターでの今後の活動に
  ついてディスカッション

ここでは、第3回午後に行われたグループ別フィールドワークのうち、筆者が参加した農林塾インタビューの結果を報告する。

◇インタビュー調査の概要

本調査は、農林業に関心を持つ都市住民の意識とその背景を明らかにするために行ったものである。2016年6月11日土曜日、下市町小路地区において開催されている農林塾の現場に伺い、インタビュー調査を実施した。インタビューの対象者は、農林塾の発起人で下市町の地域おこし協力隊員でもある秋谷奈美氏および農林塾参加者であり、質問の形式としては半構造化面接を用いた。対象者に関しての事前情報がほとんどなかったことを踏まえ、質問項目は適宜変更・追加している。ただ、参加者に対してのインタビューの内容は、どの対象者の場合でも、この農林塾に参加するに至った経緯や理由、下市について感じること、今後やっていきたいことが主である。なお、対象者一人一人の状況を丁寧に読み取る目的と、プライバシー保護の観点から、質問者3名に対し、インタビュー対象者1名という個人面接の形をとり、他の参加者とは少し離れた場所でインタビューを行った。インタビューは質問者が用意した質問にある程度答えてもらった上で、話題がおおよそ出尽くした頃を目安に終了したが、インタビュー時間は概

ね 15 分程度である。インタビュー対象者には、授業レポートとして公表することについて、インタビュー時に了承を得た。

また、今回は、時間に限りがあったことと、秋谷氏と参加者の皆さんのご厚意で突然のインタビューを快諾してくださったという背景から、インタビューの手法の厳格性よりも、質問者と対象者のコミュニケーションを重視して、聞き取りしている傾向があることを注記しておきたい。そのため、インタビュー対象者の年齢や職業など基礎的な個人情報については、対象者が自ら話した場合を除いては無理に聞くことはしておらず、正確な情報としては不十分なところがある。

◇農林塾の様子について：秋谷氏へのインタビューと見学を通して

参加者にインタビューするにあたり、この農林塾の情報や活動の様子について知っておくため、活動の一部を見学させていただくとともに、発起人の秋谷氏からお話を伺った。ここでは、そこからわかったことをまとめておきたい。

まず、この農林塾は月二回（第二・第四土曜日）開講しており、受講料は一回につき 8000 円である。対象者は町外・県外の都市部の就業者を想定しているため、仕事や家庭に負担の少ない週末月二回としているそうである。また、一回につき 8000 円という受講費は秋谷氏も「決して安くはない」と話すが、無料型の農業体験にしてしまうと途中から参加しない人が出てきたり、あまり真剣でない参加者も集まってしまったりするため、この少し高めの料金設定にすることで、真剣に農業について学びたいという参加者のみを集め、活動の質を上げているそうである。実際、活動の様子を見ていても、見るからに「農家」というような様子ではない参加者たちが真剣なまなざしで講師の説明を聞き、時にはかなり踏み込んだ栽培方法についての質問も積極的に行っていた。秋谷氏によると参加者の多くは普段は神戸や大阪、京都など町外・県外でサラリーマンや OL として働いている人がほとんどで、年齢層としては 40 代から 50 代までの人が多いという。女性の参加者よりは男性の参加者の方が多いということであるが、どの人も「ある程度経験を積み、社会を知る中で人生に何が必要かわかってきて農業に行きついた」という点で共通しているという。けれども、すぐに農家になろうというわけではなく、従来の仕事を継続しつつ、家庭の状況を踏まえながら、少しずつ農業の知識を身に着けようとしている人がほとんどだということで、仕事や家庭の事情で欠席した場合でも学習を続けられるように、毎回の活動はビデオで記録し、後で視聴できるようにしているということだった。

また、この農林塾を開設するにあたり、地元住民の理解と協力が必要不可欠であったことについてもお話があった。農林塾が行われている土地や利用する水は地元の人に借りているそうで、トイレに関しても近所で借りるということだった。このように農林塾の開催場所は民家に囲まれた集落内にあり、参加者は地元住民以外であるので、参加者の声や目線が地元住民の生活の支障にならないように寒冷紗を周りにめぐらせてブラインド代わりにするなどの配慮も行っていると

いう。秋谷氏によると、農林塾開設から1年半かけて地元の人々の信頼を得て、みんなでここまでやってきたということだった。家一軒分以上はあると思われる畑では、ナスやトウモロコシ、スイカ、トマト、レタス、カボチャ、オクラ、サツマイモ、ジャガイモ、ニンニク、イチゴといった様々な季節の野菜や果物が栽培されており、参加者（この日は10名弱）、秋谷氏、講師が時には冗談を言って笑い合いながら、和気あいあいとした雰囲気で、けれども汗を垂らしながら真剣に農業について学んでいたのが印象的だった。

◇農林塾参加者へのインタビュー

農林塾でのインタビュー調査を行う班では、秋谷氏からの説明と見学の後、二つのチームに分かれてそれぞれ調査を行った。筆者らのチームでは、3名（男性1名、女性2名）の参加者にインタビューを行った。

まず、一人目は、4、50代の男性で、普段は県外でサラリーマンとして働いているという。この方も、ある程度都市部で働いて社会のことがわかってくると農業がしたくなったために、この農林塾に通い始めたという。通うには決して近い場所ではないが、週末に近くでやっている場所はないため、ここにしたという。子どもがまだ成人しておらず、土地もないため、すぐ移住というわけにはいかないが、かなり本気で移住して農業をすることを考えているということだった。話の内容以外から読み取れたこととしては、とてもイキイキとした表情で話してくださったこと、社会人としてある程度経験を積んだ者として、筆者らにアドバイスをくれるような感じで話してくださったことなどがある。インタビュー一人目でこの男性には立ち話という感じでお話を聞いてしまったため、後の2名ほど十分にお話を聞くことができなかったのが悔やまれるが、様々な経験をしてきて、たくさんのことを考えてきたからこそ、農業と真剣に向き合っているということはよくわかった。

次に、お話を伺ったのは、30代の女性である。この女性は兵庫県西宮市在住でふだんは会社員をされており、JRを2時間半ほど乗り継いでここまで来ているという。通ってくるのは確かに大変だが、有機農法や林業に関心があるため、そういったものを含めトータル的に学ぶことができる点が決め手となってこの農林塾を選んだそうである。西宮市付近でも農業体験の場はあるがなかなか林業までやってくれるところはないということだった。この農林塾を知ったきっかけは、JRの駅に置いてある『奈良』という無料の広報パンフレットで、もともと奈良が好きなために刊行ごとにこのパンフレットは手に取っていたが、偶然その中でこの農林塾の小さな広告を見つけ、是非参加してみたいと思って問い合わせしたとのことだった。参加し始めたのは一期の終盤であったため、この4月から二期生として一から学び始めているところである。

この女性は農業に興味を持つまで、両親が野菜を（家庭菜園のような形で）栽培していても専ら食べるばかりで、何か育てようとしてもすぐに枯らしてしまう状態だったという。「自分には作るのは無理なんだ」と諦めかけていたが、ある程度年齢を経てきて、また社会の動きから、「やっぱり循環社会なんだ」と思い至り、農業に関心を抱いたそうだ。また、以前からやってみたいと思いながら学業や仕事のために挑戦できなかった織物を趣味として始めることができ、その後草木染にも関心が広がった。この草木染は無駄が出ない、まさに循環型の作業であり、この織物の趣味を通して改めて農業への関心が強くなったという。ただ、この時点では「畑をすれば農業や

ってるんだ」と思っていたが、この農林塾に来てみて、どうやらそれは「違うんだ」と気づいたそうである。それはどういうことかというと、農業とは畑だけではなく、雨や山とのつながり、さらには生き物とも関わっているということに気づいたということである。そして、現在はいきなり兼業農家ということは考えていないが、とりあえず自分が食べるものは一部でも自分で作れるようになりたいと思っているそうである。仕事が忙しくてコンビニの食事になることや、今後の健康に危機感を持つようになり、食への興味が出てきたのと、社会でもそのような環境や自然を見直す風潮が出てきていることが影響したと話されていた。この方にとって、農林塾は仕事とは視点の異なる活動であるだけでなく、「ある種の緊張感」があるものだと話していた。それは食べ物を作るからというのと、きちんと育てるためには毎日状態を確認しなければならないからである。今はこの農林塾で学んだことを活かしつつ、自宅のベランダのプランターでオクラ、大和真菜、紐唐辛子、ゴーヤ、ナーベラ（沖縄の野菜）、紫蘇などを育てているそうである。大和野菜に関心がある彼女は後々奈良で大和野菜を育てて、京野菜に比べるとマイナーな大和野菜や奈良をもっと広めていくのが夢であると話してくださった。尚、奈良が好きなのはもともと奈良出身であるためであり、故郷についてもっと知りたいという気持ちがあるからでもある。また、下市については、電車で下市に来ると開けた感じで、畑も山も川もあって自然の宝庫で、ありがたい、気持ちのいい場所だと表現されていた。さらに、吉野地域の歴史についても触れ、出身地である奈良市との違いを感じ、憧れがあるということだった。ただ、そうした魅力ある下市に後々住めたらいいという気持ちもあるものの、専業農家ではなく仕事と両立するのが理想であり、そこをどのように折り合いをつけていくかが問題だと考えているようだった。最後に、今期の目標として有機や自然農法、林業とのつながりについて広く学んでいきたいと教えてくださった。この女性も終始とてもイキイキと自分の思いや夢について語ってくれ、インタビューの終盤には質問者にも野菜を育てた経験はないかなど尋ねる熱心さで、真剣に農業と今後の人生の過ごし方を考えていることを強く感じた。

最後、三人目の女性は 20 代の女性で、他の参加者との関係性を見ても、最も若い参加者のように思われた。この女性は普段は事務職をされており、京都から近鉄で 2 時間ほどかけて下市まで来ているそうで、やはり先ほどの女性同様、遠いと感じている様子だった。この農林塾に参加するまでの経緯については、この方はもともと山や自然が好きで山登りをしていたのだが、それが広がって兵庫県で畑のボランティアをしていた。けれども、ボランティアだと求められた作業をして部分的に関わるだけであり、体系的に理論を学ぶという形ではなかったため、もう少し学びたいと思っていた。そのような中で、そのボランティア先で知り合った鳥取の梨農家の手伝いもするようになり、果樹を育てることの楽しさを知った。そこで、果樹の栽培について詳しく知りたくなり、柿と梅の栽培について学ぶことができるこの農林塾に参加することを決めたという。今後は、まだはっきりとしたビジョンはないし、様々な体験を経る中で価値観が変わってくることもあるだろうが、とりあえずは「最初からこれをやらなくちゃ」と決めるのではなく、やりたいことには挑戦し、桃やブドウなど他の果物についても学んでみたいと考えているそうである。尚、果樹栽培に惹かれた理由の一つは、腰を曲げずに上を向いて作業をすることが多い点で、その背景には過去にジャガイモの栽培をしたときの土寄せの作業が腰を曲げて大変だったという経験があるそうである。質問者側から、下市の柿農家が後継者不足や高齢化で困っているというこ

とを話すと、「年齢が上がると大変になるのかな」と少し不安も感じている様子だった。

農林塾には5月から参加されているということだが、農林塾との出会いは1月に大阪で開催された農業フェアで、そこで今後の農業との関わり方について相談したところ、この農林塾を紹介されたのだそうである。その背景には、果樹は収穫できるようになるまで時間がかかることと、土地はあってもなかなか資金がないということで、京都では果樹というと丹波のブドウくらいしかないという問題があったそうである。このように果樹栽培は野菜以上に困難が多いため、正直なところ、現在でも果樹栽培で独立就農したいかというと迷いがあるという。資金面や計画性の問題を考えると起業くらいの覚悟が必要なことであり、今後もし果樹栽培に関わっていきたいという気持ちはあるものの、それがプライベートなのか、仕事なのかという点ではまだ考えあぐねているという複雑な心情を話してくださった。

下市の印象については、意外なことに「人が多い」という返答をもらった。それはなぜかというと、この方がボランティアに行かれている兵庫や鳥取と比べると、まだ下市は駅からも近く、民家も密集しているので、都会ではないが比較的集落としてまとまっているので、そう感じるということだった。また、鳥取の場合は、京都から片道3時間から4時間ほどかかるということで、現地での活動を考えると二泊三日でないと行けず、日帰りできるという点でも下市はまだ良いということだった。

この方は様々な場所で農業に関わっているようで、篠山でも他のボランティアと交流したり、時には神戸大学の学生とも関わったりすることもあるという。最後に価値観の変化について具体的にはどのような例があるか、もう少し踏み込んで質問したところ、フルーツは嗜好品なので、農業をやる人でフルーツをやりたいと思っている人は少ないのではないかと最初は思っていたが、やる側になってみると農業は毎日やることがあるので、需要があるかというよりも(その作物が)自分に合うかというマッチングを考えて、作物を選ぶようになったということを挙げられた。さらに、この作物選びに関しては、他にも、「やりたいから」ではなく、生計のためにはこの作物を育てなければならないという人もいることや、これ失敗したから次はこれといろいろな作物に挑戦する人など、ただ食べる側にいるだけではわからなかった様々な決め方があることを知り、考えの幅が広がったように感じるということだった。他にも、農業に関わる前までは何とも思わなかったジャムや丹波の黒豆の煮物、コンビニのカットフルーツなどについて、外見に傷があるものでも加工することによって、無駄なく利用したものであることを知り、「上手いな」と感じたことなどを教えてくださった。この方は、若い頃から農業に関心があり、実際にかなり積極的に行動を起こされているということもあり、お話からは農業に関するボランティアやフェアなど様々な取り組みが各地で行われていることがわかった。その一方で、果樹栽培という農業の中でも比較的難易度の高い分野に関心があることによる困難についても知ることができた。インタビューの様子からはまだ迷いのある複雑な心情も垣間見えたが、穏やかな口調からは念願の果樹栽培について学ぶ機会が得られたことの充実感や果樹への強い意志が伝わってきた。

◇考察

今回は、この小路地区の農林塾について大まかに知ることと3名の参加者へインタビューを行うことしかできなかったが、それぞれ様々な経験や考えを経たことで遥々遠方の都市部からこの

農林塾に集まってきたことがわかった。そして、秋谷氏が望んだように、どの人も真剣に農業について学ぼうとしている様子で、インタビューをした3名を含め、今後も農業に関わっていきたいという人がほとんどであるということが読み取れた。ただ、そうした農業や自然への憧れや意欲を強く抱いている一方で、現在の仕事を完全に辞め、田舎へ移住して農家となるには、少なからず抵抗感があるようである。その背景には、農業の経済的な難しさや土地の確保の問題、さらに家族の生活など現実的な問題があることに加え、「農業は経済的あるいは肉体的に厳しい」という認識に起因する心理面での不安があるのではないかと考える。確かに社会では昨今、有機野菜が人気になったり、農業体験の機会が増えたりして農業への再注目や自然の再評価という風潮があるが、農業に関連する現実的な課題が解決していない以上、なかなか就農にはつながり得ないという厳しい現実があることがインタビューからも読み取れた。

また、参加者たちのように人生やこれまでの生活を見つめ直した結果、農業に関心を抱き行動を起こそうとしても、電車で2~3時間行かなければ十分に学べる場所がないという現状はやはり問題である。さらに、この小路地区の農林塾の成功に関しては秋谷氏の存在が大きいと考える。上記のとおり、小路地区の地域住民への配慮や参加者へのきめ細やかな対応があったからこそ、農林塾をすることが可能になったのだし、地元の広報誌や都市部での農業フェアを活用したPR方法の有効性も忘れてはならない。こうしたことはなかなか過疎化・高齢化が進む地域の住民や自治体だけでは実現できないと考える。活動風景を見ていても、おそらく地元の農家の方だと思われる講師と都市部からやってきた働き盛りの参加者たちの間に秋谷氏が立って上手く関係を築くきっかけを作っているように見えた。秋谷氏の人間的魅力が成し得ていることも多いだろうが、地域おこし協力隊の人と人とをつなぐという役割はやはり極めて重要であると考える。

今回は農業や地域活性化について重要な結論が出せるほどの調査はできなかったが、農林塾の見学と3名の参加者へのインタビューは農業が抱える現実的な難しさとその打開策は何かを考える上で非常に参考になった。そして、コミュニティ・リサーチの観点からは、地域おこし協力隊を地域活性化のキーパーソンとしてとらえ、彼ら・彼女らが加わることで、地域やそのコミュニティにどのような変化が起き、どのような成果を招くのか、今後さらに詳しく見ていきたいと考えている。

（5）　歴史学実習における活動報告

■歴史学実習概要

歴史学実習（文学部専門教育科目）は、人文社会学科歴史学コースが提供する授業である。従来は、奈良近辺で日帰りフィールドワークを２回行い、さらに受講生の希望による２泊３日の遠方地フィールドワーク（博多・長崎・鹿児島など）を実施して、年度末に受講生が手分けして報告書を仕上げて終了、という内容だった。また、各フィールドワークでは、あらかじめ受講生が現地説明のための資料を分担作成し、現地では参加者全員がそのコピー集を持ちながら歩き回り、受講生が現地説明をしていく、というやり方をとっている。

COC+事業の開始に伴い、小路田泰直副学長の求めに応じて、フィールドワーク対象地を奈良県及び紀伊半島を中心とする太平洋沿岸に絞り込んだ歴史学実習を実施している。昨年度の実習は２泊３日で十津川村と熊野のフィールドワークを行ったが、今年度は２泊３日で紀伊半島を一周するコースを辿った。

■事前準備

教員側がコースを設定して、受講生８名が以下の項目の資料を分担作成して、Ａ４両面印刷27枚の資料集を作成した。

■資料集項目

闘鶏神社、熊野水軍、三段壁洞窟、潮岬、トルコ軍艦遭難慰霊碑、熊野三山、補陀洛山寺、熊野詣、熊野古道、熊野灘、熊野の神話、神武東征伝説、花の窟神社、尾鷲神社、天狗倉山と修験道、志摩国、伊雑宮、伊勢神宮、お伊勢参り、御塩殿神社、松坂

■行程表と参加者

行程表

16日（水）	17日（木）	18日（金）
9:00近鉄奈良駅出発	9:00出発	9:00出発
田辺市闘鶏神社	那智勝浦町補陀洛山寺	志摩市磯部町伊雑宮
白浜町三段壁洞窟	熊野那智大社	伊勢市二見町御塩殿
串本町潮岬	新宮市熊野速玉大社	伊勢神宮
紀伊大島	熊野市花の窟神社、大泊	松坂市本居宣長ノ宮
トルコ軍艦遭難慰霊碑	尾鷲市尾鷲神社	（計画するも見送り）
17:00那智勝浦町到着	17:00志摩市到着	17:00奈良市到着

参加者（計17名）

上段左より那智大社、
御塩殿神社、伊勢神宮
下段左より
潮岬神社、伊雑宮

■歴史学実習体験報告

2016年度の歴史学実習は和歌山・三重の沿岸の史跡を巡り「黒潮の道」を実感するもので、熊野水軍の伝説が残る闘鶏神社、三段壁洞窟にはじまり、トルコ軍艦遭難の地や、花の窟神社、大泊など、さまざまな史跡から太平洋を眺め、存分に潮風を浴びる3日間だった。

実習は事前調査、訪問、事後調査の流れで行われた。実際に現地を訪ね、歩き、見ていくなかで事前に関心を持っていた場所とは違う箇所に興味を移したのか、事前学習の担当箇所とは全く違うテーマで事後レポートを仕上げる者も多く、文献を読むだけでは得られない興味・関心というのが実地において初めて花開くこともあるのだと思われた。私の場合は、沿岸部ということで事前学習の折より漠然と、地震による津波の影響が気にかかっていたのだが、現地を移動するなかでその気がかりが明確なものへと変わっていった。

今回の実習で我々が通った和歌山県田辺市から三重県伊勢市にかけての沿岸部は東南海地震における津波の被害地域である。しかし、私たちは移動中のバスの車窓からも、ホテルの部屋の窓からも海を眺めることが可能であった。もし今、東南海地震が起これば、そこには必ず津波が押し寄せるのにも関わらず、人々はそこで津波のことなど気にもとめず生活している。人だけならば緊急時のみ避難することも考えられるが、とうてい避難させられない神仏までも津波に流されかねないその地へすえてしまうのはどういうわけなのか。このような思いのもと、奈良に戻ってから疑問を解消するべく史料にあたった。

日頃、この奈良盆地のなかで暮らしていると考えることの少ない海を巡る様々なことが、3日間の実習のなかでは思考の中心となっていたのを感じる。海は外界との隔たりではなく、開けた「道」なのだという先生方の認識も、海を間近にしてはじめて腑に落ちたような気がした。それでも私の関心が「海の道」よりは津波の方へと向かっていったように、同じ場所を訪れても感じ取ることというのは皆違っていたに違いない。実際に紀伊半島を巡った3日間だけでなく、事前

事後学習を含め、この実習で得られたものは、今後、それぞれが研究を進めていくうえで活きてくるだろう。

■歴史学実習体験報告

歴史学コースでは、2016年11月16日から18日にかけて、和歌山県、三重県の海岸沿いの地域を中心にフィールドワークを行った。紀伊半島といえば、修験道の修業が行われるような山がちな地形や、黒潮のような早い潮流といった厳しい地理的条件が思い起こされるであろう。このことが自然豊かで神秘的な印象をもたらす一方で、同時に過疎の一因ともなっている。実際に、今回の実習での史蹟から史蹟へのバス移動も、長時間に及ぶものであった。このような点から紀伊半島は交通の発展から取り残されてきたように見える。

こうした状況の中、どのようにして紀伊半島に人を呼び込み活性化させていくかという問題について、紀伊半島の歴史の中にその解決の糸口を見つけることができる。例えば今回の実習で訪れた熊野市大泊は、鹿児島県坊津に匹敵する規模をもつ湾港であり、長く語り継がれたその名前が示すように交通の要衝であったと考えられる。また熊野灘は早い潮が流れる交通の難所であるというイメージが強いが、実習で目にした熊野灘は、天候に恵まれたこともあるだろうが非常に穏やかな凪いだ海であったことに驚かされた。こうした点は文献からのみでは判別できないことであり、実際に目にすることによって初めて間違った認識を正すことができる。また紀伊半島には伊勢神宮や熊野三山などの有名な寺社が存在するが、それだけではなく現代人にとって交通の不便なように思われる地域にも、大きな寺社が数多く建立され現代まで守り継がれている。例えば花の窟神社や尾鷲神社などである。また補陀洛山寺の裏山では、中世から近世に溯ると推定される石塔を見ることができる。このことは、それらの寺社が歴史上重要な地位を占めていたこと、そしてそうした有力な寺社の繁栄を受け入れる基盤を紀伊半島が保持していたことを示している。

こうした点が今回の実習によって明らかになり、歴史における紀伊半島は、現代におけるイメージとは逆に、交通の要衝であり非常に繁栄した地域だったと結論づけることができる。我々が、紀伊半島を交通の不便な地だと考えてしまうのは、近代以降の鉄道の開発が平野部のように容易に進まなかったことが大きく影響しているだろう。すなわち、近代以降に構築された熊野像を前近代にまでさかのぼって当てはめてしまっているのである。まずはこのような先入観を払拭する必要があるだろう。

我々のさらなる課題は、交通の要衝であった前近代の熊野と、交通の発展に取り残された近代の熊野とをいかに結びつけるかということである。すなわち前近代においてなぜ紀伊半島は発展しえたのかを探究し、そしてそこに現代において紀伊半島を活性化させてゆくためのヒントを見つけねばならない。いうまでもなく紀伊半島の史蹟は、観光資源として高い価値を持っている。しかしそれらの史蹟を、現代と無関係な過去のものと見なすだけでは、紀伊半島のもつ可能性を充分に活かしたものとは言えな

いだろう。紀伊半島の史蹟が示す歴史上の繁栄と、現代における課題とのギャップを埋める、比較史的視座に基づいた建設的議論こそが、紀伊半島の活性化に不可欠と思われる。

② 就職(企業との関わり)について

1．学生向け意識調査の実施

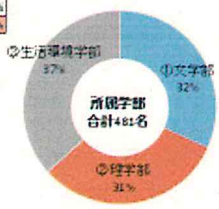
やまと共創郷育センターにおいて、平成 29 年 2 月に 1 回生を対象に、「奈良県内で就職することに対する意識調査」を行い、学生の奈良県での就職に関する意識の実態を把握することに努めました。意識結果については以下の通りです。

奈良県内で就職することに対する意識調査(学部学生対象)

平成29年2月アンケート調査結果

1 あなたの所属学部と出身地を教えてください。

学部	人数	割合
①文学部	153	32%
②経学部	152	31%
③生活環境学部	176	37%
合計	481	100%

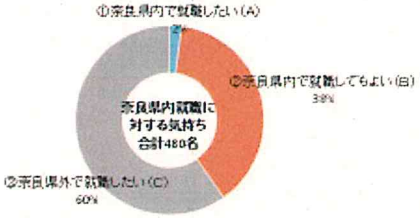


1 出身地 (*無回答5名)

出身地	人数	割合
①奈良県	41	9%
②奈良県外	435	91%
合計	476	100%

4 奈良県内で就職することに対して、以下の選択肢の中から
ご自身の気持ちに一番近い選択肢を選んでください。(*無回答1名)

気持ち	人数	割合1	割合2
①奈良県内で就職したい(A)	10	2%	40%
②奈良県内で就職してもよい(B)	183	38%	
③奈良県外で就職したい(C)	287	60%	60%
合計	480	100%	100%



7

県外で就職したいという学生の理由(抜粋)

- *地元に帰って就職したい。*
- *奈良県でしたいと思う職がなさそうなのと、したい職が東京などにありそうだから。*
- *地元に戻って、地元の地域振興に貢献したいから。*
- *最低賃金が低い、交通手段が少ないから。*
- *住みには良いが働き続けたいとは正直思わない。*
- *県外の方が大手企業が多く、視野が広くなるから。*
- *奈良にいる必要性を感じない。奈良じゃなくても良い。*
- *奈良での就職について全く知らない。*
- *奈良県内に私がなりたい職業で働ける場所をしらないため。*
- *奈良は田舎だから、東京か大阪に行きたい。*
- *奈良県に魅力的な企業がないから。*
- *自分のつきたい職業がなさそう。*

・収入が安定した企業が奈良県外の方があると思うから。
・生まれた時から奈良なので外に出てみたい。
・関西圏で就職するなら大阪や京都の方が魅力的。

2．奈良県内企業限定パンフレットゾーンの開設

やまと共創郷育センターでは、学生に奈良県内企業の魅力に触れてもらう機会向上を目指し、キャリアサポートルーム（就職支援室）に「奈良県内企業限定パンフレットゾーン」を開設しています。

従来からの業種別に企業紹介ゾーンに加えて、県内企業をより身近に感じていただくため県内企業ばかりを有効的に紹介・活用するゾーンです。

このゾーンには、県内企業から寄せられた会社案内、募集要項が集められおり、やまと共創郷育センターで随時受け付けしています。

県内企業パンフレットゾーンの拡大や奈良県内企業の紹介方法についても今後一層の充実を図り、「あなたとナラ働こう」、「奈良をリードする躍動企業」として、学生と県内企業とのマッチング機能を持たせるよう取り組んでいきます。

３．奈良県内企業魅力発見セミナーの開催

県内企業魅力発見セミナー
（平成28年11月19日実施）

●本学学生を中心とする奈良県立大学、奈良工業高等 専門学校との合同セミナーです。
●参加企業別のブース（1企業1テーブル）を設けます。各企業の担当者と少人数で接することができるチャンスです！OGが来てくれる企業もたくさんあります。
●奈良県は医療・福祉に従事する人の割合が高く、製造業では、繊維・プラスチック・食品加工が盛ん。高い技術をもつオンリーワン企業も多く、業界の動向、方向性、仕事内容、求める人間像等について直接聞くことができ、業界研究と仕事理解の重要な材料となります。

セミナーには来年度以降に就職活動を始める学生ら120名の参加とCOC＋参加企業を含む県・県警などの官公庁や医療、福祉、金融、保険業など様々な業種から23社等の参加がありました。

平成 28 年 11 月 19 日（土）、奈良女子大学やまと共創郷育センターでは奈良工業高等専門学校、奈良県立大学とともに採択された文部科学省の「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC＋）」の一環として「奈良県内企業魅力発見セミナー」を開催しました。

セミナーには来年度以降に就職活動を始める学生ら 120 名の参加と COC＋参加企業を含む県・県警などの官公庁や医療、福祉、金融、保険業など様々な業種から 23 社等の参加がありました。

セミナー開始に先立ち、N202 教室では藤原センター長の司会でガイダンスが行われ今岡学長より、参加学生に対してセミナーの趣旨等についての説明、やまと共創郷育センター支援室からタイムスケジュールや諸注意等についての説明があった後、学生達は３班に分かれて会場である第一体育館に移動しました。

学生の移動中に第一体育館では、今岡学長から参加企業等担当者への挨拶があり、学生が会場に入場後、参加者全員に藤原センター長より、セミナー開始に際しての挨拶がありました。

会場内では参加企業ごとにブースが設けられ、参加学生たちは自身が希望するブースに着席し、企業等担当者からの話を熱心に聴き入っていました。

学生が話を聴ける企業等からの説明回数は最大４回で少ないチャンスを十二分に活用し、３時間半のセミナーは無事終了しました。

長時間にわたるセミナーでしたが、アンケートを提出して退場する学生の目はセミナー開始前よりも輝いて見え、得るものが多かったことを窺わせていました。

参加学生からの感想

色んな企業、官公庁の仕事を知ることができためになりました。説明時間が長いこともあり、組織内の部署の仕事とか細かいこともわかって良かったです。質問時間もあってわからないこと、知りたいことがわかってよかった。

1 回生であるにも関わらず、このような就職活動に近い企画に参加させていただき、とても良い経験になりました。人気の企業はもう少し席を増やしていただけたらと思います。

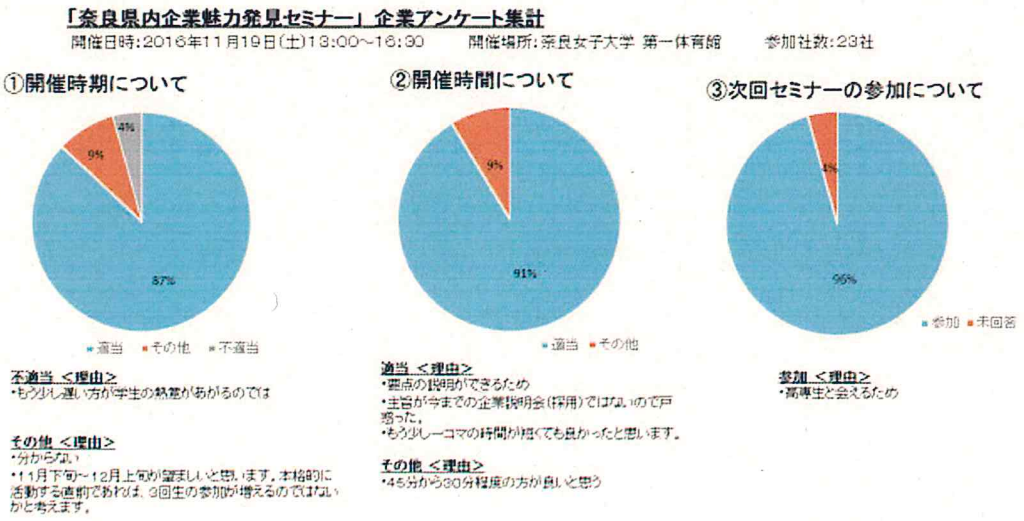
1 回生で就活について、何も知識がなく、初めてセミナーの情報を見たとき興味はありましたが、不安の方が大きく、参加するかどうか悩みましたが、参加してみると企業の方が何回生でも関係なく、丁寧にお話してくださったので、少しでも就活のイメージがもてたと思います。

奈良県のさまざまな業種をいっぺんに回るという事で、とても魅力のあるセミナーだと思います。

奈良で働くことは考えていなかったけれど良い企業さんもたくさんあると知り興味がわいた。きちきちとした雰囲気ではなかったので質問もしやすかった。

奈良にこんなにたくさんの企業があるということが分かって良かったです。名前を知らなかった会社でも、話を聞いてみるととても良い会社で興味をもちました。また今回のような会があったら参加したいです。

地元にも魅力のある企業がたくさんあることを再確認できるいい機会になった。(奈良高専)



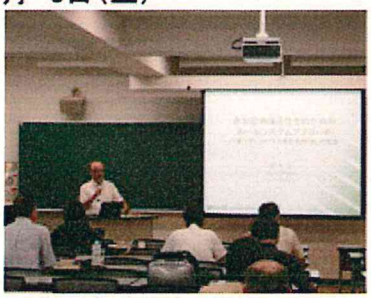
③　社会的還元（地域貢献）事例について

1．各種セミナーの実施

奈良女子大学やまと共創郷育センターでは、学生と地域社会との連携(絆)を強化するため各種セミナーを実施しています。平成 28 年度に実施したセミナーは以下の通りです。

紀伊半島地域連携シンポジウム2016　　平成28年　8月　6日(土)
「地域を学ぶ地域で学ぶ地域を生かす」

紀伊半島3県に所在する奈良女子大学・三重大学・和歌山大学より教職員が集い、地域の活性化に知恵を出し合い、地域に学問知を還元することを目標としたシンポジウムです。シンポジウムの中では、中川正三重大学学長補佐(キャリア教育担当)より三重大学が実践しているAI(アプリシエイティブ・インクワイアリー)を取り入れたキャリア教育について、内田忠賢奈良女子大学学長補佐(社会連携担当)より地域住民が自身の身近な生活を自分たちでまとめる都市民俗生活誌の重要性について、吉田道代和歌山大学観光学部教授よりLGBT観光の地域活性化への有効性について紹介いただきました。吉田道代和歌山大学教授の報告の際には、トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム「地域人材コース」奈良市留学支援プログラム「奈良を『開く』人材」グローカル人材育成プロジェクトの一環で奈良市内でホテル等と連携してLGBTウェディングを実施することを計画している学生から事業計画の説明もなされました。当日は、三重県、和歌山県のほか、京都府、大阪府からの参加者もあり、注目度の高さが伺えました。


中川正三重大学学長補佐（キャリア教育担当）による講演の模様

吉田道代和歌山大学観光学部教授による講演の模様

参加者からの感想

これまで授業などで地元でなく他の地域をフィールドとすることがほとんどでしたので、『身の回りの宝探し』、『あるもの探し』という考え方は新鮮でした。この考え方をもって地元を見直してみようと思います。

自治体にとってLGBTの受入れが都市イメージの向上につながるというのが新知見であった。

いきなりLGBTウエディングが受け入れられるか未知数なので、もう少し市民への認知度を高める方法も同時に考えたほうが良いのではないでしょうか。

『ないもの探しではなく、あるもの探しをしよう！』というお話がとても印象的でした。

問題解決型が欠点注目、AIが長所注目というところが目から鱗が落ちました。今後何らかな形で実践できるといいなと思いました。

「奈良女子大生と学ぶ！消費生活講座」の開催　平成28年12月3日（土）

奈良女子大学生活環境学部生活文化学科の学生有志による消費者問題研究会BEACSによる『奈良女子大生と学ぶ！消費生活講座』が下市町、奈良県消費生活センターの共催・協力のもと下市町観光文化センターにて開催されました。

吉野警察署の多田生活安全課長から最近の消費者被害について話をいただいた後、市民消費者活動団体「あんあん」のメンバーと奈良女子大学生による寸劇・解説やクイズなど交えながら県内で実際に発生している「点検商法」、「悪質商法（電話勧誘・訪問販売・訪問買い取り）」などの消費者問題について学びました。

奈良県消費生活センターからは「困ったときはすぐに188番」へ、奈良女子大学の大塚准教授からは「ヒヤリハット体験などを通じて消費者力を身に付けることが大切」との説明があり、参加者は真剣に聞き入っていました。

参加された約50人の住民からは、寸劇やクイズを楽しみながら様々な消費者問題について「知らなかったことを知れた」、「持っていた知識を確認できた」、「楽しく学べた」と大変好評でした。高齢者が消費者被害に遭わないため、トラブルを未然防止するためには、家族や近所の方など地域のつながりが大切であることの認識を深める良い機会となりました。

参加者からの感想

楽しく拝聴できました。

わからない点がよくわかった。もっとくわしく知らせて欲しい。
いろいろと改めて気づいたことがあった。話し合いもあってよかった。

少子化や人口減少策も今後進めてください。

身近に消費生活センターの職員に接することができた。

テーブル毎に意見を出し合ったこと、皆様の意見をまとめて発表してくださったことが良かった。

幅広い意見が出てたくさんの知識を得ることができました。若い方に私たち年寄りの意見を聞かれて、また考え方もいろいろと変わったことと思います。参考になりました。

「奈良県女性の活躍促進フォーラム」の開催　平成28年12月17日（土）

「奈良県女性の活躍促進フォーラム」（奈良県主催、奈良女子大学やまと共創郷育センター共催）が、本学記念館において、本学学生及び関係者を含め約230名が参加して開催されました。

フォーラムの開催にあたり、奈良県健康福祉部こども・女性局長　福西清美氏及び奈良女子大学副学長（やまと共創郷育センター長）　藤原素子氏から挨拶があった後、第一部として、前厚生労働事務次官　村木厚子氏から「女性の活躍～あなたに贈るメッセージ～」と題した基調講演があり、村木氏の厚生労働省時代の経験などを織り交ぜながら、女性の出産・育児に係る問題や女性の働き方等々について、ユーモアを交えながらお話しがありました。

第2部では、奈良県男女共同参画県民会議会長　音田昌子氏をコーディネーターとして、奈良のママが仕事をつくる会代表　井上京子氏、同志社大学教授　川口章氏及び産業カウンセラー　舟橋正枝氏の3名による「『男女がともに支える暮らしやすい奈良県』を目指して」と題するパネルディスカッションが行われました。パネラーからは、「夫婦の役割分担が大事」「パートナーをほめること」「男女に対する親の価値観を押し付けない」といった意見等が出て、参加者は、女性が活躍しやすい奈良県をつくるために何が大切であるかということを再認識しながら、終始和やかな雰囲気に包まれたまま閉幕しました。

２．奈良経済同友会との交流・懇談会

奈良女子大学社会連携センターでは、地元企業との連携をさらに強化するために、平成 18 年度から奈良経済同友会との交流・懇談会を開催してきました。

平成 28 年度については、下記の通り実施いたしました。

開催日時　　平成２９年１月２３日（月）　１５：００～１９：００

場所　　奈良女子大学理学部Ｇ２０１教室

参加者　　６５名

プログラム内容

「奈良女子大学の奈良女子大学のグローバル化に向けた取組みについて」

奈良女子大学生活環境学部中山研究室での取組み紹介

「グローバル人材の育成に向けて―国際交流センターの取組み紹介」

奈良女子大学国際交流センター講師　　松永　光代

「奈良女子大学とバングラデシュ・ベトナムとの理系学術交流活動について」

奈良女子大学 研究院自然科学系教授　　高須　夫悟

「奈良県における国際交流の現状と課題」

公益社団法人まちづくり国際交流センター理事長　　吉田　浩巳　氏

３．奈良女子大学第 14 回研究フォーラムの実施

奈良女子大学社会連携センターでは、大学での教育・研究成果を生かしながら、広く社会との連携協力に組織的に取り組んでおります。その一環として、一般の方に本学の教育研究活動を知って頂く機会として、年に一度研究フォーラムを開催しています。平成 28 年度は、本学教員や学生が地元自治体や地域の方と協働して取り組んだ『地域連携事業』及び『学生ＮＡＲＡ活プラン』成果報告会を実施いたしました。

開催日時　　平成 29 年 3 月 9 日（木）　１３：３０～１７：００

場所　　奈良女子大学コラボレーションＺ３０６教室

参加者　　名

プログラム内容

１．地域連携事業の成果報告

「奈良の食農産業と市民をつなぐ「食文化観光」の実践」

奈良女子大学研究院生活環境科学系助教授　　青木　美紗

「消費者市民育成プログラムの開発と実施」

奈良女子大学研究院生活環境科学系准教授　　大塚　浩

「地方創生と連動した田原本町商店街活性化事業」

奈良女子大学研究院生活環境科学系教授　　中山　徹

「『健康なら 21Step アップ事業』の行政・地域との連携強化プラン」

奈良女子大学研究院生活環境科学系准教授　　星野　聡子

２．学生ＮＡＲＡ活プランの成果報告

「知った”NARA”安心プロジェクト～奈良女生による「消費者市民」育成講座」

「農業体験・大和野菜普及プロジェクト」

「親子の食育プロジェクト」

「剣道交流大会支援を通した奈良県過疎村活性化プラン」

４．COC+事業評議会、COC+事業シンポジウムの開催

（１）第２回やまと共創郷育センター事業評議会（平成 28 年 7 月 14 日）

（２）やまと共創郷育センターシンポジウム２０１７（平成 29 年 3 月 18 日）

（1）「第2回やまと共創郷育センターCOC+事業協議会」

平成28年7月14日（木）

平成28年7月14日（木）13時30分より奈良女子大学において第2回やまと共創郷育センターCOC+事業協議会を開催しました。当日は参加自治体、参加企業より多数の出席者がありました。奈良女子大学・奈良工業高等専門学校、奈良県立大学よりこれまでのCOC+事業の取り組みと今後の予定について説明を行った後、出席者全員で意見交換を行いました。平成27年度事業に対する意見や今後の事業実施に対する要望等様々な意見を頂戴しました。頂いたご意見・ご要望については、今後の事業実施に反映させるよう努めて参ります。

(2) 「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)シンポジウム 2017」
共創郷育:「やまと」再構築プロジェクト

平成 29 年 3 月 18 日(土)

平成 29 年 3 月 18 日(土) 奈良女子大学記念館にて奈良女子大学・奈良工業高等専門学校・奈良県立大学の 3 校による「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」シンポジウム 2017 を開催しました。事業協働機関である奈良県、下市町、野迫川村、十津川村の関係者の他、奈良県内の企業関係者、奈良佐保短期大学を含む大学・高専関係者から多数の参加者がありました。

今岡春樹 奈良女子大学長による開会の挨拶、後藤景子 奈良工業高等専門学校長、伊藤忠通 奈良県立大学長の挨拶に続き、来賓の松谷幸和 奈良県副知事より挨拶があり、奈良県の地方創生総合戦略とも関連の深い COC+事業への期待と県内産官学の一層の協働を表明されました。

第 1 部では奈良女子大学 藤原素子副学長兼やまと共創郷育センター長、奈良工業高等専門学校 藤田直幸 COC+事業責任者兼専攻科長電気工学科教授、奈良県立大学増本貴士地域交流センターCOC/COC+推進室特任准教授から各校の平成 28 年度の COC+事業成果および平成 29 年度事業計画が発表されました。引き続き、第 2 部では自治体・企業および学生による平成 28 年度の COC+活動事例報告・研究報告が発表されました。また、第 3 部では、「奈良の魅力を知り、奈良を支える人材育成の実践的取組」をテーマとして、自治体・企業・教員・学生によるパネルディスカッションが行われ、活発で幅広い意見交換がなされました。

シンポジウムを通じて、参加者間で成果や課題の共有を行うとともに、COC+事業のさらなる発展のために、産官学が一体となり、協働しながらそれぞれの立場で今出来ることに尽力しなければならないとの誓いを新たにしました。

《平成 29 年 3 月 18 日　シンポジウムの様子》

④　今後の取り組みについて（平成２９年度の活動予定）

１．教育支援活動

（１）地域志向科目の拡充

『地域社会の抱える課題を見つけ働き方を考える』といったより実践的な人材育成を目的とした「なら学＋（プラス）を開講いたします。内容は、観光産業への理解を深め、課題を探る（奈良の観光産業の現在と未来）、伝統産業(靴下）への理解を深め、課題を探る（靴下づくりのｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝ）、伝統産業（製薬）への理解を深め、課題を探る（漢方薬について学ぶ）、伝統産業(林業）への理解を深め、課題を探る（森林の環境と吉野杉の利用拡大）、特産品(柿）への理解を深め、課題を探る（柿四方山ばなし）、女性の起業を考える、地域づくりを考える（高齢化社会・人口減少への対応）等を予定しています。

（２）地方創生にかかる教育セミナーの実施

県内企業経営トップによる実践的な講義による学生と企業の相互理解、県内女性起業家、県内自治体、企業、地域活性化に向けて活動するＮＰＯ団体にて活躍している女性等による教育セミナーをお願いし、地域が必要としている人材教育、女性キャリア教育を実施いたします。

（３）地域活動拠点・十津川サテライトの整備

平成27年度の野迫川村、平成28年度の下市町に引き続き、十津川村での学生の学習活動拠点を整備いたします。

２．就職支援活動

（１）県内インターンシップの拡充

インターンシップは学生にとって、働く姿を見ることで、社会人としての基礎力を養い、地元企業への就職の橋渡しにもなります。学生・県内企業双方にメリットのあるインターンシップのあり方を探りながら、ＣＯＣ＋事業参加自治体、参加企業との協力のもと県内企業様向けインターンシップフォーラムの開催を予定しています。内容は、インターンシッププログラムの全体設計(事前準備から終了までの流れ）、インターンシップ受入れ県内企業様からの事例紹介、企業様向けインターンシップ入門セミナーを予定しています。

（２）県内企業見学会の実施

県内企業の魅力や知識を学生に知ってもらうためバス等による県内企業見学会を予定しています。学生に地域産業・地域経済に対する理解、地元企業の魅力を深めさせるとともに、学生と県内企業との距離を高めることを目的にしています。

（３）県内企業限定魅力発見セミナーの開催整備

平成２８年度に引き続き、学内にて県内企業様に限定した会社説明会を予定しています。

自社ＰＲしていただくプレゼンテーションも予定しています。実施予定が固まり次第、ご案内させていただきますので、奈良県内企業への就職を視野に入れている学生との交流の場として是非ともご参加ください。